

【MedSci Forum】 1期生学位記授与式学類長式辞（卒業生に贈る言葉）

浦山 修（看護・医療科学類長）

一期生の卒業を祝う

看護・医療科学類長 浦山 修

本日、医学専門学群看護・医療科学類医療科学専攻を卒業していく40名の皆さん、卒業おめでとうございます。保護者の方々にも、心よりお祝いを申し上げます。

皆さんは、一期生として、この学び舎を巣立っていきます。その学び舎ですが、新校舎建設の計画は財政上の問題で頓挫、また年次進行とともにカリキュラムが出来上がっていくという、皆さんは、決して恵まれたとはいえない環境の中での勉学を余儀なくされましたが、今日、ここに、卒業の晴れの日を迎えることができました。皆さんの、これまでの頑張り、まず敬意を表します。

看護・医療科学類は、来年度からは看護学類と医療科学類とに分かれて、再出発します。コメディカルという括りよりは、それぞれの学問と教育体系に基づいた人材育成を図ろうという、コンセプトからであります。このいわゆる保健学科の解体と新たな高度医療専門職の養成課程である医療科学類の設置は、全国初の試みで、全国の人々が筑波、その一期生である皆さんの今後の進むべき道に、注目しています。皆さんは、我われとともに教育改革の先頭に立っていることを認識してください。

「先頭に立つ」ということはどういう意味なのか、医学のある先達の例を紹介しながら、お話したいと思います。

皆さんは『蘭学事始』という本を読んだことがありますか。福井・小浜藩の侍医であった杉田玄白が1815年に、その40年前に仲間とともに取り組んだオランダの解剖書『ターヘル・アナトミア』の翻訳の苦労や思い出を綴ったものです。1771年3月4日、杉田玄白、中川淳庵、前野良沢の3人は、現在の東京荒川区の

小塚原の仕置き場において人体解剖を見学し、その場に持参した『ターヘル・アナトミア』の図の正確さ(すなわち西洋医学の進歩)にたいへん驚き、その翻訳を思い立ったのでありました。玄白はアルファベット25字さえ知らず、わずかに良沢が長崎から持ち帰った簡単な辞書をたよりに、作業を開始したのですが、「誠に櫓舵なき船の大海に乗り出せしが如く」で、翻訳は遅々として進みませんでした。それでも「フルヘッフェンド」を鼻中隔の盛り上がった様子と想像し「鼻柱(はなばしら)」と訳した時の、彼らの喜びはたとえるものがなかったそうです。このようにして訳語の数も次第に増え、3年後に完訳しました。かれらの一大事業、『解体新書』の発刊は、18～19世紀の日本社会の中に蘭学が定着する契機となり、当時の医学の地位向上にたいへんな貢献となりました。

1869年に『蘭学事始』の出版を斡旋した福沢諭吉は、かれらの業績を「一学創始」(単なる翻訳ではあるが一つの学問を打ち立てたに等しい)と言って絶賛しました。

彼らが「先頭に立つ」ことができたのはなぜでしょうか。小塚原ではそれまでも人体解剖(腑分け)は何回も行われていたそうですが、玄白たちの熱心さは腑分けの老人を驚かせたそうです。“革新的なもの”は解剖にあったわけではなく、それをまさに見学した“彼らの目”にあったということができます。

皆さんは卒業後、大学院への進学あるいは病院や企業への就職など、それぞれの道を歩み始めようとしています。医療科学がこれから発展・展開する領域には、一生を捧げるだけの価値のある仕事がたくさんあります。「一学創始」の気概あるいは大きな志をもって、仕事に取り組み、自らを高め、豊かな人生を送ってください。実は、先ほど紹介したオランダ語「フルヘッフェンド」は、『ターヘル・アナトミア』のオリジナルはドイツ語で書かれているのです

が)ドイツ語の「ヘルヘツフェン(verheffen)」に
当たり、鼻中隔の盛り上がり言うのではなく、
本当は「自らを高める」という意味であります。

皆さんの未来に、幸多きことを祈って、これ
を“はなむけ”の言葉とします。

本日は、誠におめでとうございました。

(平成19年3月23日)